

る昏れた道端の家の窓にベチカの火はあかあかと燃え、  
二重窓のペゴニアの花の紅が目にも痛い。

凍えきつたラーゲルの起居も、それなりに耐えるこ  
とのできるようになった一九四七年の冬近く、終わり  
に近い船便は我々をカザンに運び、本当のダモイの確  
証を乗せて列車はウラル山脈を東に越える。スベルド  
ロフスク（エカテリンブルク）の夜の空に生産の火は  
赤く、沿線になおラポータの日本兵士もまだ見えるシ  
ベリア鉄道をナホトカへ。アクティブのいじめもこら  
えて触れる日本海の水は冷たい。

一九四七年（昭和二十二年）十二月、最終のこの年  
の帰還船「雲仙丸」は函館に入った。

父亡き故郷の母に、許された字数の電報を打つ。

ミトセヘテ カエルミナトノ ヒサメカナ ブジ  
カツシ

## シベリア抑留体験記

静岡県 鈴木 伊太郎

明治四十四年三月一日、小笠軍土方村下土方二八六  
六番地において出生。大正十五年三月、土方尋常高等  
小学校卒業。農業手伝い。家族―父母、兄夫婦、弟、  
本人、六人。昭和六年徴兵検査、甲種合格くじのがれ、  
第一補充兵となる。昭和八年四月十二日、小笠軍大坂  
村三七八一番地、鈴木左次馬の養子となる。昭和十四  
年六月十日、満州黒龍江省慶城県華陽開拓団へ入植。  
昭和十五年、家族皆渡満、農業を営む。

昭和十九年三月十日、満州戦車七連隊（二三〇四  
二）部隊召集、入隊（勃利）。兵器は中位。動員令に  
て南方行き、整備を十分にして出動。一部残留となる。  
残留兵と転属兵とで戦車三十五連隊（一三〇四二）部  
隊編制。戦車は残り物で悪い。整備して使う。兵器は  
旧式が多かった。軍服は防寒服まで上等のものがそろ

っていた。隊員はよい兵隊であった。六個中隊そろっていた。兵器は悪かった。勃利より二十年の春、公主嶺へ移動した。

公主嶺において二十年八月九日、空襲警報のサインで知った。連隊長の訓示がすぐ始まった。本日、ソ連が参戦した、戦車三十五連隊は新京警備につけとの命令。直ちに準備、公主嶺より列車輸送とのこと。兵隊はあるべきことが来たのだ。速やかに準備、兵器を公主嶺駅まで送る。その前に弾薬受領、弾薬庫には戦車へ詰め込む弾しかない、補給の予定なしとのこと。三十分撃てば後は弾なし、爆弾抱えて敵の戦車の下へ飛び込むのみ。何とも心細い限り。

準備整い八月十一日公主嶺駅を出発、十三日、新京駅に着く。夜中、列車より戦車、荷物をおろす。直ちに新京警備につく。二、三日でソ連軍と戦うことになるとのこと、身の周りの者は軍隊手帳まで焼け、敵に取られてはならぬとの命令。惜しい物もあつたが、みな焼いてしまった。これで何もかも終わり、生命まで終わりと思つた。子供に会いたいと思つた。何やら

落ち着かない複雑な気持ちで、眠つたのか眠らないのかわからない一夜が明け、いよいよ八月十四日、死が近づくと気が持たない。ばたばたとして一日が過ぎる。

短い夜が明けた。八月十五日、暑い朝だった。中隊長は「連隊本部へ行く。鈴木、中隊長室の留守をせよ」と命じて出かけた。昼食の支度をして、正午間近になつても帰らぬ。一人、中隊長室でラジオを聞いてみると、正午前、突然、重大放送があるのでスイッチを切らずに待てとのこと。困つたな、おれ一人ではと思つているところへ曹長と伍長が入つてきた。重大放送があるとのことだ、聞いてくれと頼む。さて何だろうと言ひ合せていると、玉音放送があるとのこと。陛下のお言葉とは何だろうと、かしこみ聞き始めた。戦争が終わる勅語であつた。なんじら軍人は戦う気持ちには十分あるが、我慢してくれ。お言葉の中に、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで国の根本をなくさぬよう、国の礎をつくつてくれと言われたように覚えている。戦いは終わった。気抜けがしてしまつた。みんな、口もきかないぼけの寄り合ひだつた。

外人は威張りをはじめて何でも取り上げる、目が離せない。新京市は戦争が終わっても砲声、銃声があちこちです。八月十六日、四中隊は新京駅前広場に集結して、新京警備につくことになった。駅は満州の奥地より引き揚げてくる日本人でゴった返している。うちの家族はいないかと気にかかる。市内で時々中国人の小ぜり合いがある。鎮庄のため戦車が出動する。こんな日を何日か過ぎす。八月十九日、原隊へ帰ることになった。

八月二十日、公主嶺の兵舎に入る。その後、ソ連兵の使役に使われる。町の物資を貨車に積み込む仕事。

何もかもシベリアまで送るらしい。十月十二日、列車に乗せられる。帰れることと思ひ、皆大喜びで乗り込んだ。だが、おかしいな、機関車が北向きについている。発車、やっぱり北上。ハルビン回りかなと思つて、みんなもそのつもりでおつた。ハルビンでとまる。右へ曲がると思つておつた。出発、相変わらず北上、皆騒ぎ始める。評定こもごも。あちこちで滞在。十一月二十四日、黒河へ着く。最悪のことになつてしまつた。

いよいよシベリアへ連れていかれるのか、皆、また無言。十二月一日、黒龍江氷結、物資をそりへ積み、渡ることとなる。

十二月二日、ブラゴエシチェンスクよりシベリア鉄道にて北上。全く人間を扱うのではない、家畜より悪い。銃を突きつけ、おどかすのみ。食事はろくな物をくれず、おかずはなし。そして何日か走る。寒さは厳しくなつてきた。氷点下三〇度上下。十二月七日、ナウシキ着、翌八日徒歩にてモンゴル入り。銃でたたかれ、ヴィストラ（早く）と追い立てる。皆やけくそ、動きは遅い。九日、モンゴル・スフバートルに着。滞在。

十七日、自動貨車にてウランバートル着、アングレン収容所に入る。バラック、内外なしの寒い宿舍。こより作業山に石取土をはね掘り出す。高さ一メートル、四メートル四方を五人組で積み上げて終わり。朝から夕方まで休みなし、ようやくでき上がり。冬は伐採、夏はれんがづくり。伐採は長さ二メートルの材木を高さ一メートル、四メートル四方に積み上げる。六

人一組、早朝より休みなし。一日でやつのことで仕上がり。れんがは、山から土を取ってきて練つて干し上げ、千二百枚、五人一組で仕上げる。六千枚。いづれの作業もノルマが切れば食事なし。死にもぐるいで働いた。

食事は一日三食の日は少ない。二食か一食。ない日もあった。その日は休み。食べ物なし、休みなしでは苦しいばかりだ。日増しにやせていく。力もなくなる。ノルマは同じ。死ぬ人はふえるのみ。栄養失調で亡くなる人が多い。ウランバートルへ一万五千人収容された。内、二年間で三千人も亡くなつてゐるとのこと。

ウランバートルと山林ウランバートル作業により移動、山林は山小屋のみ。シラミ、南京虫は年じゅうたかりきり、衣服を熱風消毒。入浴は飯盒一杯の湯で全身洗え。タオルをしめせばお湯はなくなる、体ふくのみ。この飯盒を洗わずに飯を盛つて食べる。言いたくもない。身体検査なし。三八度の熱があると医者に見せる。軍医は威張りちらして、作業に行けと言うのみ。上官と兵は神とこじきの違いであつた。五百人から千

人おつた。これが作業、建築、基礎掘り、清掃、れんが焼き、何でもやつた。何の作業にもノルマがついていて、終わらなければ罰、食わさない、帰れない。罪人扱い。戦い終わった人間を何でもこんな目に遭わすのかね。朝、スズメの涙ばかりの朝食を済まし、外で言われた仕事につくのみ。労役に何の温かみもなし。労役に耐えられない人も監視兵にけられるのみ。健康の管理など何もなし。朝夕の点呼に長時間立たされた。公主嶺で着服そのまま。

労役の時間、作業内容、仕事量は前に書いたごとく。量ができなければ収容所へ帰さない。帰されても飯なは仕上げさせずにはおかない仕組みだ。一人前の人間にこんなにもひどいことをしられ、やっと復員。函館へ上陸、そのまま、函館国立病院より車で迎えに来てくれて入院。七日ほど飲まず食わず、カンフル注射のみで生きており、やっと気づいた。後、医者が「奇跡だ、何か考えておつたか」と。子供、家族の安否であつた。「それでよかつた、よく死ななんだ」と。